

院政鎌倉時代の漢語サ変動詞語彙の比較研究
六文献に於ける

——特有語彙と共有語彙の観点から——

佐々木 峻

牧野 泰子

目次

はじめに

一、本稿で用いた文献資料

二、各文献特有語彙と共有語彙

三、三巻本色葉字類抄との共通度

四、おわりに

はじめに

日本語語彙史上に占める漢語の地位については、改めて論ずるまでもない。

院政・鎌倉時代は、国語史上、国語の日常語の中に漢語が盛んに取入れられる時代であり、とりわけ片仮名文と呼ばれる資料群の中からは、多くの漢語

の実例を汲み上げることが出来る。しかし、今までの片仮名文として知られる当期の確かな文献、しかもまとまった分量を有するものは、さまで多くはなかつた。然るに、近年、語学上の資料発掘・研究の努力に依つて、当期の国語の実態も次第に明らかにされるようになってきた。(詳細は、金子彰氏稿、本誌所載「鎌倉時代語研究文献目録」を参照せられた

い。就中、小林芳規博士に依る『中世片仮名文の国語史的研究』(広島大学文学部紀要特輯号3、昭和四十六年)は、当期の新資料を駆使せられ、多くの新見を述べられたものとして、研究史上、注目すべき業績である。本稿はその御研究の一小分野たる漢語語彙の、特に動詞用法のものを取り上げ、次下に述べる六文献での比較を試みようとするものである。

一 本稿で用いた文献資料

- (1) 三教指帰注(中山法華経寺蔵)。此の書誌については、先掲小林先生『中世片仮名文の国語史的研究』に詳しいので、ここでは省略に従う。総索引は広島大学文学部国語学研究室蔵『中山法華経寺蔵三教指帰注総索引稿』に依る。
- (2) 法華百座聞書抄(法隆寺班鳩文庫蔵 院政末期写本)。総索引は、小林芳規稿『法華百座聞書抄総索引』(昭和五十年三月 武蔵野書院刊)に依る。
- (3) 光言句義釈聽集記(高山寺蔵 正安元年(三九九)校本)。総索引は、『高山寺資料叢書』(明恵上人資料)第1冊(昭和五十三年三月刊行予定

東京大学出版会)に依る。

(4) 高山寺本古往来(高山寺蔵 院政時代書写)。

総索引は、『高山寺資料叢書』第2冊(昭和四十七年三月 東京大学出版会)に依る。

以下の(5)(6)文献については、語認定その他に関して、

前四文献と異なるところがある。

(5) 古本説話集(梅沢彦太郎氏蔵 院政時代成立録

倉中期頃書写)。総索引は、山内洋一郎編『古

本説話集総索引』(昭和四十四年四月 風間書

房刊)に依る。

(6) 宇治拾遺物語(日本古典文学大系本)。総索引

は、境田四郎監修『宇治拾遺物語総索引』(昭

和五十年二月 清文堂刊)に依る。

なお、比較に供すべき当期の文献は他にも多くあるが、本稿は、現在調査完了の右六文献についての報告である。なお、六文献の立体的特徴及び語彙量の概算^算は、左の如くである。

○注釈文体としての『三教指帰注』(約一万六千字)

○説経文体と説話(多く仏教説話)文体との混雑体としての『法華百座聞書抄』(約三万三千字)

○注釈文体としての『光言句義釈聽集記』(約二

方一十字)

○消息文体としての『高山寺本古往来』(約一万八千字)

○仏教に偏らない説話文体としての『古本説話集』(約五万八千字)

○右と同趣であるが時代の下る『甲治拾遺物語』(約二十一万四千字)

二 各文献特有語彙と共有語彙

(1) 語幹部分が字音語で、それにサ変動詞が付いたもの

(i) 語幹部分が一字の字音語から成るもの
この類のものについては、

◎ 語幹部分が漢字二字の字音語から成るもの比べて、又散間で共通度が高い。

◎ 『色葉字類抄』(前田家本及び黒川家本)において、サ変動詞のついた形で登載されている。

という特徴を有している。以下、各文献特有語彙、共有語彙、の順に整理・記述する。

*ここに言う「特有語彙」の「特有」は、本稿で取扱った六文献を比較した結果、特定一文献に

○ 所有語彙について

(a) 『三教指帰注』特有語彙(4語)

じきす「食」4例(25オ1・25ウ6・53オ4・45ウ7)

しやくす「借」1例(32オ7)

ちす「治」3例(44ウ5・44ウ6・44ウ8)

ふす「付」1例(2ウ6)

(b) 『法華百座聞書抄』特有語彙(7語)

じゆす「修」4例(オ1・オ42・オ95・オ59)

ひしゆうす

ちよくす「勅」1例(オ23)

ほいす「拝」1例(オ31)

ほうす「奉」1例(オ24)

ぶす「奉」1例(オ42)

ひほうす

ぶくす「服」1例(オ82)

ちらうす「勞」1例(オ47)

(c) 『方言由義紙聴集記』特有語彙(37語)

あんす「安」2例(オ22・下22)

のみその語彙が存することを意味するものである。(なお用例の所在を示す書式は、すべて各
編索引の方式に従っている)

いんす「印」3例(上363・上364)

*えんす「縁」1例(上36)

おうす「忘」1例(上82)

かす「加」1例(上370)

かく「く」学[6例(上24・上83・上89・上93・上96)]

*かひす「合」8例(上168・上200・上201・上41・上44)

⑧きす「記」1例(上35)

ぐうす「共」1例(上29)

⑧くるす「帰」1例(上9)

くんす「訓」1例(上343)

けす「計」2例(上70・上92)

こくす「極」2例(上24・上26)

⑧ぞす「生」4例(上371・上25・上65・上75)

しつす「失」1例(上75)

⑧しんす「訛」3例(上295・上241・上69)

しやうす「生」16例(上7・上160・上162・上154・上185)

上186・上241・上252・上77・上72・上52・上53・上111

下144

じやう「了」[成]2例(上95・上98)

じゆす「咒」1例(上37)

じゆんす「順」2例(上115・上118)

しよす「書」3例(上130・上135)

⑧せふす「撰」2例(上271・上280)

そくす「却」1例(上156)

だす「達」1例(上304)

たいす「対」5例(上260・上412・上413・上583・上156)

ちやうす「長」2例(上22・上84)

*はす「笈」1例(上49)

⑧はいす「配」1例(上50)

べちす「別」1例(上20)

へんす「遍」2例(上14・上176)

ほんす「反」1例(上310)

ほんす「翻」1例(上113)

やくす「約」11例(上190・上196・上199・上301・上302・上522・上523)

ゆす「融」2例(上178・上274)

りす「離」1例(上202)

りふす「立」1例(上69)

⑧りやくす「略」1例(上324)

⑤高山寺本古往来。特有語彙(20語)

⑧きむす「禁」1例(上84)

くゑす「決」4例(上174・上368・上72・上72)

けいす「啓」6例(上104・上204・上24・上180・上195・上96)

けいす「経」1例(452)

④ごす「焉」5例(417・246・404・414・352)

④ごつす「察」1例(124)

すむす「参」1例(143)

④さんす「敢」2例(131・414)

④しやす「謙」4例(414・273・313・19)

しよす「延」8例(436・59・224・228・395・30・12)

92)

しんす「進」1例(284)

たつす「達」1例(403)

とうす「通」1例(392)

ひつうす (ひとしたもの本編で取扱う文献の中、他かいまするか) に見られる同義異形の語、以下同じ。

④ひす「秘」1例(18)

ふくす「伏」1例(387)

べんす「弁」1例(192)

ほうす「奉」3例(191・163・406)

ひぶす

めいす「命」1例(406)

ようす「用」1例(216)

るす「達」1例(129)

(e) 古本説話集。特有語彙(4語)

④けんす「験」3例(141・156・241)

④ほんす「判」1例(712) 色葉「ハンス」

ほんす「盆」1例(529) 歌

*「短」の辨詞が、山内氏注すし。

④えうす「要」1例(195)

(f) 『宇治拾遺物語』特有語彙(15語)

④えいす「詠」1例(3715)

おくす「臆」1例(123)

かす「嬌」1例(228) 嬌感

④かす「害」1例(3411)

かうす「勸」1例(1034)

しゆうす「修」1例(17215)

ひしゆうす

④せんす「煎」1例(186)

④たいす「帯」1例(21510)

だんす「談」1例(17310)

ちやうす「打」1例(2778)

④てむす「点」1例(13711)

にむす「任」1例(4614)

④ばつす「罰」2例(1375・1382)

④ふうす「封」1例(100) 標感(ひ色葉「ホウス」モアリ。

④ほうす「崩」1例(376)

以上については、語彙量の格別多い。宇治拾遺物

語に16異語あるのは当然であるとしても、語彙量のきわだつて少ない『古往采』に20異語の認められるのが興味深い。当時の往來文体の求めたもの一つが、一字漢語の具有する一種の簡潔さにあつたのであろうか。

○共有語彙について

二文献以上に共通する一字の漢語動詞は、次掲の如く、漢字二字から成るそれと比べて共通度が高い。か、それら共通語の実質を眺めると、文献間に成る偏りが認められる。以下には、便宜上三教指帰注を中心にして、共通度の高いものから順に取上げていく。

四三教指帰注と、世四文献に共通するもの

(全文献に共通するものは皆無) *

- ④ぐす「具」③ (275・5・216・6・481) | ⑤6 (52・225・54・47・146・121) | ⑥6 (52・225・54・47・146・121)
 - ⑤358・419 | ⑥15 (308・151・84・318・434・511・176・144・143・158・161・164・162・234・1427) | ⑦17 (255・301・464・497・645・738・77・7814・804・804・805・816・817・822・810・781・823)
- *以下、文献名は、略称に従う。③一三教指帰注
④一光言句義釈聽集記
⑤一法華

*しんす「信」③ 1 (12・3) | ④3 (52・54・64) | ⑤7 (362・738・41・158・218・330・356) | ⑥1 (293) | ⑦2 (75・244)

右「具す」「信す」の二語については、高山寺本古往來にこれらの見られないことが注意せられる。説話部分を多量に有する文献類にこれらが多く見られることは、「具す」「信す」の語義からして蓋し当然のことか。

⑥ろんす「論」③ 1 (298) | ④2 (263・42) | ⑤1 (21) | ⑥2 (71・171) | ⑦7 (76・13・72・191・243・312・291)

⑦宇治拾遺物語にこれがなく、世の文献に於いても出現頻度は高くないが、高山寺本古往來に際立ってこれの多いのは、文体と語彙とが深く関わり合うものであることを示唆するものであろう。

⑧へんす「変」③ 2 (17・11・315) | ④1 (15) | ⑤2 (173・156) | ⑥4 (87・201・291・251) | ⑦1 (362)

各文献とも頻度は低い。光言句義釈聽集記にこれが見えないのは、「変す」の語義が、説話性と百座聞書抄に
⑧一古本説話集
⑨一宇治拾遺物語

関係が深く、注釈性とは縁が遠いことに基くものであろう。なお、『高山寺本古往来』の一例は、

。葉落^ハ色^ニ変^リシテ^ハ之^ノ後^ニ (382)

とある例で、先の説語類に見られるものとは、変ずる、対象を異にしている。

(4) 『三教指帰注』と、他三文獻に共通するもの

●あいつ「愛」(三) 4 (50オ1・40オ2・5ウ3・30ウ1) |

(三) 3 (上183・上184・上185) | (集) 1 (190ウ) | (字) 3 (191ウ・291ウ・434ウ)

●高山寺本古往来にこれが多く、世方で『三教指帰注』、『宇治拾遺物語』にこれが多く見られるのはともかく、『光言句義釈聴集記』に三例見られるのは、注目に値する。左にその実例を掲示しておく。

。此、蓮花^ノケカレサルカ如クシテアルカト思^フ是^レ愛スルニ佛^ノ生^ス (上183)

。如来加持カト云ハ是^レ愛シツヘキ衆生^ヲ為^ス (上184)

。衆生佛境界ヲ受メルハ以テ功德カナルヘシ (上195)

説語類の「愛す」とは、動作の対象をまったく異にしていて、別義とも見られるものである。

●ぞんず「損」(三) 1 (21オ3) | (半) 4 (上6ウ・上93ウ・下24ウ)

下30 (一) | (集) 1 (186ウ) | (字) 3 (192ウ・145ウ・24ウ)

この例については、今の所述べるべき問題を見出し得ない。

(5) 『三教指帰注』と他三文獻に共通するもの

●うす「住」(三) 1 (26オ5) | (半) 1 (下17ウ) | (法) 3

(オ) 333・275・オ249

●うす「持」(三) 1 (18ウ4) | (半) 1 (上184ウ) | (集) 1 (245ウ)

けうす「考」(三) 2 (21オ8・21オ5) | (半) 1 (上154ウ) |

(集) 1 (245ウ)

●せいす「制」(三) 2 (28ウ3・29ウ6) | (法) 1 (ウ45ウ) |

(字) 9 (114ウ・114ウ・115ウ・115ウ・36ウ4・371ウ・439ウ・641ウ・147ウ)

●せうす「養」(三) 2 (47オ5・16オ5) | (法) 2 (オ281ウ・オ282ウ) |

(半) 3 (147ウ・261ウ・276ウ)

しやうす「請」(三) 1 (8オ2) | (集) 2 (65ウ・207ウ) |

(半) 5 (63ウ・274ウ・132ウ・195ウ・198ウ)

右では、『法華百座聞書抄』や『宇治拾遺物語』との共通度の高さと共に、『高山寺本古往来』との共通度の低さも見逃すべきではあるまい。

(6) 『三教指帰注』と、他三文獻に共通するもの

●やうす「行」(三) 2 (3ウ3・3ウ8) | (半) 3 (上17ウ・

下24ウ・下27ウ)

そうす「窓」(三) 1 (5オ3) | (半) 6 (上32ウ・上33ウ・上112ウ)

上66ウ・上54ウ・オ17ウ) *全例、密かなり。

つうす「通」③2 (5オ3・6オ5) | ④7 (上オ4・上オ7・上オ7) | ⑤55・下オ61・下オ65

く急す「化」③1 (17オ1) | ④3 (20オ3・20オ5・20オ11) | ⑤7 (21オ3・21オ4・21オ11) | ⑥3 (24オ3・24オ4・24オ11)

へうす「表」③2 (41オ2・41オ11) | ④2 (42オ2・42オ11) | ⑤2 (43オ2・43オ11) | ⑥2 (44オ2・44オ11)

かひす「号」③1 (18オ1) | ④1 (19オ1) | ⑤1 (20オ1) | ⑥1 (21オ1)

右では、高山寺本古往来との間に、「表す」「号す」などの共通語の見られるのが、注意点となる。

以下の例は、二三教指帰注とは共通するところが無いが、それ以外の文献相互間で、若干の共通性を示す語群である。

くわんす「觀」④2 (上オ11・下オ20) | ⑤2 (上オ11・下オ13) | ⑥1 (21オ1)

げんす「現」④8 (上オ12・上オ13・上オ14・上オ15・上オ16・上オ17・上オ18・上オ19) | ⑤8 (上オ20・上オ21・上オ22・上オ23・上オ24・上オ25・上オ26・上オ27) | ⑥4 (上オ28・上オ29・上オ30・上オ31)

ゆす「誦」④5 (上オ33・上オ34・上オ35・上オ36・上オ37) | ⑤2 (上オ38・上オ39・上オ40・上オ41・上オ42) | ⑥1 (上オ43・上オ44・上オ45・上オ46・上オ47)

めつす「滅」④1 (上オ21) | ⑤2 (上オ33・上オ34) | ⑥1 (上オ42)

しやくす「練」④16 (上オ5・上オ12・上オ17・上オ28・上オ34) | ⑤1 (上オ42・上オ43・上オ44) | ⑥1 (上オ52・上オ53・上オ54)

だんす「斷」④1 (上オ5) | ⑤2 (上オ33・上オ34) | ⑥1 (上オ42)

ちうす「注」④1 (上オ7) | ⑤3 (上オ27・上オ33・上オ34) | ⑥2 (上オ119・上オ120)

かむす「感」④1 (上オ13) | ⑤2 (上オ119・上オ120) | ⑥2 (上オ121・上オ122)

あんす「案」④1 (上オ43) | ⑤3 (上オ178・上オ179・上オ180) | ⑥1 (上オ402)

しす「死」④1 (上オ27) | ⑤4 (上オ85・上オ162・上オ163・上オ164) | ⑥6 (上オ501・上オ502・上オ503・上オ504・上オ505・上オ506)

ほうす「報」④1 (上オ167) | ⑤1 (上オ321) | ⑥1 (上オ322)

ほうす「報」④1 (上オ167) | ⑤2 (上オ245・上オ246) | ⑥1 (上オ97)

こうす「國」④1 (上オ277) | ⑤7 (上オ138・上オ139・上オ140・上オ141・上オ142・上オ143・上オ144) | ⑥1 (上オ254・上オ255・上オ256)

ぞんす「存」④1 (上オ413) | ⑤1 (上オ233) | ⑥1 (上オ414)

しやうす「證」④1 (上オ73) | ⑤1 (上オ20) | ⑥1 (上オ1)

右では、語彙の多彩々を見てとることができる。中で、「学文す」「論議す」等の特定語彙が高い頻度を示すのは、当文献語彙の一特色を示すものとして注目せられる。その他についても、説話性に関わる語彙の多いことが、一見して察知せられよう。

(b) 法華百座聞書抄 特有語彙 (27語)

* いんぜふす「引張」1例(ウ58) ち色葉「イシヤウ」

かいかうす「開講」2例(オ49・ウ352)

* かごす「加護」1例(ウ56)

くわいにんす「懷妊」1例(ウ412)

げせつす「解説」1例(ウ154)

** けだいす「懈怠」1例(オ156)

ごねむす「護念」1例(ウ10)

ざんがいす「殘害」1例(ウ248)

さんじやうす「産生」2例(ウ414・ウ417)

さんらんす「散乱」1例(ウ31)

じふばいす「十倍」1例(オ55)

しゆつしやうす「出生」1例(ウ410)

** しよしやす「書写」6例(オ163・オ312・オ444・オ449・ウ151・ウ23)

* しんじゆ「信受」1例(ウ233)

** せいぐわんす「誓願」2例(ウ38・オ405)

ちげんす「知見」2例(ウ54・ウ317)

* づゑす「図繪」1例(ウ357)

** てんでんす「展転」1例(ウ367)

どくじゆす「読誦」2例(ウ159・オ306)

ぶつめつす「仏滅」1例(オ462)

* ほんやくす「翻訳」1例(オ445)

* らいでんす「雷電」2例(ウ205・ウ214)

りんゑす「輪廻」1例(オ320)

* むうちす「療治」2例(ウ41・ウ83)

* ゑんみんす「憐愍」1例(ウ155)

* ゑんかうす「廻向」2例(ウ34・ウ13)

** ゑんまんす「円満」1例(ウ230)

右では、仏教的色彩が濃くにじみ出ているのが、注意せられる。

(c) 光言句義釈聴集記 特有語彙 (39語)

いんげんす「印現」5例(上97・上98・上99・上100・上101)

えたくす「依託」2例(上162・上163)

かいへんす「改変」1例(下256)

* かうぶくす「降伏」1例(下187)

かふしやくす「合紙」1例(下203)

かんぢやうす「刊定」1例(下204)

きよつうす「虚通」3例(下113・下114・下114)

- *くぎやうす「究竟」2例(下251・下252)
- **くきつぢやうす「決定」2例(上214・下256)
- けせつす「仮説」1例(下35)
- けつしやくす「結紮」1例(上116)
- *こつじぎす「乞食」2例(上174・上178)
- さいすいす「濯水」1例(下29)
- *さうおうす「相忘」3例(下23・下71・下106)
- *さうじようす「相承」1例(上38)
- さうまうす「相望」1例(下176)
- *じやうげす「上下」1例(上119)
- *じやうじゆす「成就」2例(上363・成熟・下253)
- *しやべちす「差別」1例(上258) 中 色葉「シヤヘン」。
- しゆけんす「修顔」1例(上555)
- しゆつせす「出世」1例(下106)
- じゆとくす「受得」1例(下27)
- せふぢす「稟待」2例(上流・上病)
- せんけんす「詮議」2例(上483・上522)
- せうやくす「増益」1例(下235)
- そくめつす「直減」1例(下188)
- たいぢす「対治」1例(上84)
- たいほんす「対斬」2例(上104・上111)
- *ちむりんす「氾論」1例(上188)

- てうぶくす「調伏」2例(上83・下186)
 - ほつむす「撻無」1例(上46)
 - へんげんす「変現」1例(下82)
 - へんじうす「遍周」1例(上389)
 - *ほうをんす「報恩」2例(上7・上7)
 - ほんしやくす「翻釈」1例(上430)
 - めいらんす「迷乱」1例(上7)
 - *よういす「用意」1例(上56)
 - りしやくす「離釈」1例(下143)
 - るしゆつす「流出」2例(上444・上56)
- 右に、仏典注釈関係語彙の多く見られることは、本文の性格からして当然の結果とも言える。が、注釈語彙の中にあつて、「合釈」「結釈」「離釈」「対翻」などは、当時に於いてもなお、個性の強い(造語的な)ものではなかつたか。
- (d) 高山寺本古往来に特有語彙(42語)
- あいなふす「哀納」1例(上434)
 - いうじよす「援助」1例(上132)
 - *いんきよす「隱居」1例(上186)
 - *えんごす「延期」1例(上198)
 - *かうほつす「寛発」1例(上232)
 - *かぶりよくす「合力」1例(上70) 中 色葉「カウリョク」。

かむぢやうす「勘定」1例(96)

*きたうす「祈禱」1例(291)

*きようす「騎用」1例(166)

*きようえんす「興定」1例(317) ㊦ 白葉「アヤエン」。

きんじす「勤仕」1例(38)

くわうりむす「光臨」1例(43)

けらくわいす「経廻」1例(44)

**すうまむす「早参」1例(235)

すむかす「参下」1例(42)

すむこうす「参候」6例(103・327・316・392・291・53)

すむとうす「参登」1例(314)

*すむにふす「参入」5例(324・336・435・362・436)

*すむはいす「参拜」1例(397) ㊦ 白葉「サニヤ」。

すむらいす「参来」1例(245)

*じやうけいす「上啓」1例(231)

*しやうだくす「承諾」1例(113)

しんじやうす「進上」3例(283・438・279)

**すいじんす「隨身」3例(122・72・233)

*すいりやうす「種量」1例(236)

せんぢやうす「選定」2例(205・366)

そんだつす「寸断」1例(196)

ちじやうす「馳上」1例(208)

*どりだうす「同道」1例(177)

なふじゆす「納受」1例(42)

ほいけんす「拝見」1例(86)

ひごくす「度極」1例(378)

**ひまんす「肥満」1例(230)

*ひろうす「披露」1例(158)

*ふくしす「服仕」1例(43)

ほうをつす「奉謁」1例(38)

*ほうじす「奉仕」2例(13・153)

ほうじやうす「奉上」1例(205)

ほうしやくす「奉借」2例(430・262)

*ほていす「補綴」1例(153)

らいじふす「来集」1例(175) ㊦ 白葉「ライライ」。

みらいゑす「来会」1例(174)

をんしやくす「恩借」1例(404)

右では、他五文獻とは全く質を異にする語彙の様相を見てとることが出来る。(類義・類転のものゑを治んど見ることができない。) 就中、頻出する敬讓関係語彙は、文範体の特色語彙とすべきものか。

(e) 古本説話集の特有語彙(13語)

*かくもんす「学問」2例(255・297) ㊦ 白葉「学門」。

かかくもんとす「孝六」

かやくす「逆修」1例(59) *定字在紙

*かまうす「希望」1例(165)

かかんす「護身」1例(56)

かやうじす「精進」1例(57) 色葉「ン」部。

かむけいす「参詣」1例(156)

かすかいす「受戒」4例(316, 317, 317, 317) 色葉「シ」部。

かすぢやうす「修行」1例(58) 色葉「シ」部。

かしゆぎやうす

かす「出家」2例(157, 157)

*かじしよす「追従」1例(57)

どやうす「王葬」1例(57)

かへんぐゑす「変化」1例(155) 色葉「ン」部。

かきらんす「歴覧」1例(155)

右では、信仰関係語彙が半ばを占めているが、(b)

(c)ほどの顕著な傾きとは成しがたい。

中。宇治拾遺物語。辨有語彙(55語)

かいはんす「開眼」1例(57)

かうしんす「疾申」2例(44, 45)

かうみやうす「高き」2例(161, 57)

かかくこす「恪勤」1例(57) 色葉「カ」部。

*かむだうす「勤当」2例(116, 117)

*かきしやうす「起請」4例(367, 367, 367, 367)

かきしよくす「気色」1例(46) 色葉「ン」部。

*かきせいす「祈請」2例(313, 312)

かきぢやうす「給仕」1例(57)

*かきやうてんす「行進」1例(216)

*かくつうす「苦痛」1例(58)

かぐぶす「供奉」1例(57)

くわんじんす「勧進」1例(314)

**くゑす「帰依」1例(162)

くゑてうす「帰朝」1例(311)

くるふくす「帰眠」1例(52)

くゑじやうす「化粧」1例(54)

くゑんぞくす「還俗」1例(379)

*けいひやくす「齊白」1例(368)

けうくわいす「交会上」1例(37)

**けうくゑす「教化」1例(376)

*けうくんとす「教訓」1例(57)

げかうす「下向」1例(173)

こうくわいす「後悔」1例(304)

*さいしきす「彩色」1例(132)

*さうがす「掃除」1例(57)

すむくわいす「参会」1例(336.11)

*したくす「支度」1例(373)

**しやうじんす「精進」1例(264) ひさうじす

**しやうぞくす「装束」1例(103.12)

**じゆかいす「姜戒」8例(264・247・303・285・337.11)

332・337・336.14)

しすかいす

ひじゆぞす「呪咀」1例(451) ひ色葉「シエシヨ」

**しゆりす「修理」6例(336.6・181.7・193.16・197.4・151.12・332.5)

*すいちくす「陋逐」1例(332.7)

*せうえりす「逍遙」1例(268.14)

ひせうとくす「所得」1例(335.15) ひ色葉「シヨトク」

ひせんくす「前駆」1例(314.6) ひ色葉「セントク」

せんじす「宣下」1例(434)

*ぞせいす「蘇生」1例(165)

たいきやうす「大饗」1例(78.4)

たいさんす「退散」1例(338)

*たいめんす「対面」2例(432・437.14)

*ちやうもんす「聴聞」1例(53.15)

*ちようあいす「寵愛」1例(183)

ひつちす「通志」1例(170.11) ひ色葉「ツウヤ」

ひびきやうす「読経」1例(53.15) ひ色葉「トクヤウ」

ほふらくす「法衆」1例(44)

めいよす「名譽」1例(44)

**もくよくす「沐浴」1例(336.13)

*ようじむす「用心」1例(337.5)

*らいほいす「礼拝」2例(339.9・339.4)

*るでいす「流罪」1例(405.14)

*れいせつす「礼節」1例(436.9)

*ゑしやくす「会釈」1例(337.13)

以上に見られる多彩さは、本文献の語彙量が六文献中最大であることに起因すると考えるのが妥当であろう。が、それ以外の要因も考えられなくはない。○共有語彙について

四三教指帰注と、他二・三の文献とに共通するもの

るもの

*しゆげやうす「修行」(三)1(21.8) 1(42.2)(上)

49) 1(10.10) 高・オ23・ウ291・オ75・オ268・オ283・オ49

ウ310・ウ334・オ103) 1(宇)2(28.4・157.14)

ひすぎやうす

**くちやうす「供養」(三)1(27.4) 1(13)(ウ112・オ230

オ238・オ400・オ274・オ465・ウ334・オ375・オ381・オ330・オ451・オ395

452) 1(15)(274.15・156.12・191.7・261.13・264.10・271.15

1(14.7)

370 11・273 14・274 16・275 26・275 27・275 276 9)

*「こらんす」御覽【三】4 (18オ2・19ウ3・23ウ7・47ウ7)

一集 10 (47ロ・277 10・278 5・104 1・166 8・171 1・16 7・11 9・

246 5・172 6) 一集 24 (24 11・19 7・307 13・352 2・352 2・354 4・

382 12・411 8・416 4・416 7・185 15・46 4・138 10・214 4・214 11・277 10・

375 15・241 15・258 7・34 4・147 16・358 4・416 15 1) 一集 2

(370・382)

*しんどうす「震動」【三】1 (3オ3) 一集 1 (26) 一

① 2 (88 16・90 1)

*すいす「隨喜」【三】1 (33オ3) 一集 5 (460・オ25・

オ29・オ70・オ74)

ゆきやうようす「饗応」【三】1 (33オ3) 一集 1 (284)

一集 2 (58 15・150 12) 4. 魚葉「キヤウラウ」。

けさうす「懸想」【三】2 (49ウ8・30ウ3) 一集 1 (157 9)

一集 2 (151 7・249 4)

*けうやうす「孝養」【三】2 (36ウ4・4ウ8) 一法 1

(オ29)

*けんぶむす「見参」【三】1 (25オ4) 一集 2 (95 2・84 14)

*せつかいす「殺害」【三】1 (19ウ8) 一集 1 (81)

并運語彙は概して平凡(文体的特徴を表わす語彙

とはなし難いもの)であることは 言うまでもない

(語彙によつて文体的特徴を把握しようとする方法

を前掲とした場合に言えることである。)

(4) 三教指帰注以外の文献相互間に共通するも

の

*「ぐぞくす」具足【三】2 (下8ウ4・下15 1) 一法 1 (161)

*「じゆぢす」加持【三】3 (下25 3・下25 4・下26 1) 一法 3 (オ27 1・

下16 10・オ15 4)

*「りやくす」利益【三】1 (下5ウ0) 一集 2 (ウ22 6・オ50)

*「ぬほりす」困控【三】1 (オ37 1) 一集 3 (オ44 3・オ44 4・オ41 1)

*「かぢす」加持【三】4 (下24 1・下24 2・下27 1・下27 2)

(81 16・154 2・37 2・オ23 1・41 1・38 16・165 1)

**「こんりふす」建立【三】4 (下21 1・下27 1・下41 1・下150 1)

① 1 (40 4)

*「るてんす」流転【三】1 (156 1) 一集 1 (62 4)

*「あんぢす」安置【三】2 (オ23 3・オ26 1) 一集 1 (123 4)

① 1 (176 4)

*「すむく多す」懺悔【三】2 (オ21 5・オ31 7) 一集 1 (265 7)

一集 2 (オ25 3・134 4) 4. 魚葉「サンクエ」。

わうじやくす「往生」【三】9 (ウ110 6・ウ37 7・ウ34 4・ウ35 5・ウ143 3)

オ27 1・オ27 2・オ27 3・オ26 5) 一集 2 (267 7・268 2) 一集 2

(14 7・10 10)

*「かんばつす」早魃【三】1 (ウ101 1) 一集 1 (38 3)

*「きぬむす」祈念【三】1 (オ45 1) 一集 1 (31 7)

一五七

しゆつけす「出家」⑧ (ホ30・新・33・ホ20・ホ49・

ホ5・ホ33・ホ35) 一③3 (ホ11・ホ12・ホ13) ひすけす

＊ねむぶつす「念仏」④1 (ホ143) 一④2 (ホ152・ホ166)

＊さたす「沙汰」⑤2 (ホ171・ホ172) 一④4 (ホ173・

ホ174・

＊けちえんす「結縁」⑤2 (ホ171・ホ172) 一④1 (ホ173)

＊あんないす「案内」④1 (ホ174) 一④1 (ホ175)

＊えんいんす「延引」④2 (ホ176・ホ177) 一④1 (ホ178)

右には「信仰関係語彙」がかなり自立つが、それ

ら加、三教指帰注と関わりを持たないといこ

とは、三教指帰注が、少なくとも語彙論的には

他と質的に異なつた基盤に立つものと言ふこともで

きるのではないか、

(四) 語幹部分が三、もしくは四の字音語から成るもの

以下に、語幹部分が三乃至四の漢字から成る漢語動詞を取上げる。各文献とも、当該例は僅少である。そのためか、共通語彙は全く存しない。

三教指帰注では、左の一語のみである。

＊しやうじんけつさいす「精進深斎」1例(ホ47ウ8)

法華百座闍書抄、五語。

法華百座闍書抄、五語。

＊あいみんなふじゆす「哀愍納受」1例(ホ28)

＊いかうえんぜつす「開議淺訥」2例(ホ29・ホ164)

＊くわんぎゆやくす「歡喜勇躍」1例(ホ22)

＊じゆぢくじゆす「受持読誦」2例(ホ20・ホ22)

＊ふじやうくわんす「不淨觀」1例(ホ7)

＊先掲「法華百座闍書抄総索引」補註参照。

＊先掲句義撰集記、一語。

＊しゆいくわんまつす「思惟觀察」2例(ホ17・ホ18)

＊高山寺本古往來、一語。

＊ふぢろす「不治致」1例(ホ19)

以上では、高山寺本古往來の例を除き、いす

れも信仰関係語彙に属するものであるのが興味深い。

＊古本説話集には例がない。

＊定治拾遺物語、一語。

＊たんまがふしやうす「端座合掌」1例(ホ16)

(2) 語幹部分が和語と字音語との複合形態のもの
以上、漢語や変動詞の中核を成すものに次いで、語幹部分が和語と字音語との複合形態を成す一類が若干例認められる。三教指帰注にはこれが少なく、定治拾遺物語にこれが多いのは、質・量の両面から見て自明の帰結ともされるが、語彙総量の

少ない。高山寺本古注集にこれが比較的多く認められるのは、注目に値する。

(2) 語幹部分が、和語+字音語の構造であるもの。この類では、三教指帰注及び法華百座誦音抄。特有の語彙は見当らない。従って四文献については左の如くである。

士言句義類聽集記 一語。

もちゑしやくす「用款」(下④35)

高山寺本古注集 九語。

めしかむす「召喚」(73)

とらへきむす「補察」(93)

もらしけいす「漏答」(18・97・237)

かへりまむす「帰参」(52)

すすみやむす「進参」(231)

はせさむす「馳参」(26)

あひすいす「相推」(29)

つきぞんす「空損」(24)

せめりようす「青陵」(16)

*「陵」はもとのまま。「凌」の意。

古本説話集 三語。

うゑこうす「植困」(27)

みまたす「見沙汰」(53)

こひねむす「念」(149)

宇治拾遺物語 十七語。

もてきやうようす「持養応」(265)

もてなしきようす「持成興」(285・442)

よろこびきようす「喜興」(143)

あひぐす「相具」(716・133・427)

とりぐす「取具」(281・24)

めしぐす「召具」(217)

よびぐす「呼具」(910・34)

かきくやうす「普供養」(145・245・250・145・146)

ほとけくやうす「仏供養」(133・271・213・274・274)

変)

ありきこうす「歩困」(16)

わらひこうす「笑困」(464)

いひざたす「言沙汰」(274・214)

とりざたす「取沙汰」(493)

たびしやうぞくす「旅装束」(263)

そらじゆすいす「空入水」(237)

やせぞんす「瘦損」(275)

おもひねむす「思念」(14)

なお、二文献以上に共通するものは、左の四語で

あるが、すべて、『古本説話集』と『宇治拾遺物語』との共通語である点が、注目せられる。(所在は上『古本説話集』下『宇治拾遺物語』)

うちぐす「打具」(19) — (31)

ひきぐす「引具」(26) — (25)・(13)・(3)・(4)

あゆみこうす「歩困」(2)・(5) — (2)・(3)

うちりようす「打凌」(14) — (42)

(b) 語幹部分が、字音語 + 和語の構造であるもの

『三教指帰注』一語

へいゆしをほる「平癒終」(13)

『法華百空聞書抄』一語

ほうじやる「報遣」(7)

『光言句義釈聴集記』三語

けうがふしをほる「校合終」(2)・(3)

じゆしかく「誦懸」(1)・(2)

すんじかく

ほうじゑる「報居」(6)

『高山寺本古往来』二語

しふしまうす「執申」(3)・(3)

せんじうす「禰失」(1)

『古本説話集』二語

すぎやうしありく「修行歩」(2)

ねむじよむ「念読」(1)

『宇治拾遺物語』十八語

かむじおほしめす「感恩召」(1)

かむじののしる「感恩」(1)

きようじみる「興見」(1)

きようじわらふ「興笑」(1)

くわんじんしあつむ「勸進集」(1)・(1)

ごらんじくらぶ「御覽較」(1)

ごらんじしる「御覽知」(1)

またしおく「沙汰置」(1)

またします「沙汰止」(1)・(1)

またしまうく「沙汰誤」(1)

またしやる「沙汰遣」(1)

しゆぎやうしのかす「修行残」(1)

すんじかく「誦懸」(1)

せいしとどむ「制止」(1)・(1)・(1)・(1)

ねむじゑる「念居」(1)・(1)

ほうじつくす「報尽」(1)

けうじわづらふ「較遣」(1)

ろんじまうす「論申」(1)

なお、二文獻以上に共通するものは、左の一語の

* 語の所在

みである。

ねむじいる「念入」(194・226)——(204・2810・2813)

344・401)

これも、前項と同様に、『古本説話集』と『宇治拾遺物語』とに共通するもののみである。

以上のゆゑについて、凡そ左のことが言えようか。

◎「宇音語+サ変動詞」の構造を待つ漢語動詞が大勢を占める中であつて、『宇治拾遺物語』に見られる、

いひてたす とりてたす

たびしやうぞくす そらじゆすいす

は、所謂「湯桶読」の体言にサ変動詞の付いたものである。これらは「和語化の進行着しいもの」と見ることが出来る。

◎文献によつて語彙総量に差異はあるが、『三教

指帰注』や『法華百座聞書抄』に語幹部分が湯桶読となつてゐるものが全く見られないことも併せて注目しておきたい。共に口語的要素を多く持つ性格の文献とは言ひながら、文体差に基く言語の質的差異として、今後の語彙研究の方法論上、留意すべき問題点を示唆するものと考へられる。

他方、訓点資料の一たる『高山寺本古往来』

に、この趣のものが比較的多く見出されることは、消息文範たる『高山寺本古往来』の言語上の一特質として、見逃すことのできない側面であると考へられる。

(c)特殊な複合形態であるもの

なお、次の如き、やや特殊な複合形態のものが若干ある。

『光言句義釈聴集記』

べちししやくす「別釈」(一上)

『宇治拾遺物語』

ごらんじきよう下「御覽」(一上)

語構成からすれば、ともに「宇音語+サ変動詞」+「宇音語+サ変動詞」であるが、前例は一字漢語同士、後例は「前部要素が三字漢語で後部要素が一字漢語」という違いがある。但し、「御覽」については、他の二字漢語とはやや性格を異にする(和語性が濃い)ことは、『光言句義釈』や『法華百座聞書抄』に例が無く、『古本説話集』に10例、『宇治拾遺物語』に24例見られることから知られよう。なお、『法華百座聞書抄』では、「見る」の尊敬語は

皆無で、尊敬表現法は、すべて「見る」+尊敬動詞」となっており、「光言句義釈集記」の方には「見る」の尊敬表現法すら見えない。

右の如き、漢語サ変動詞相互の複合形が、二字漢語動詞相互の場合に見えないことも、併せ注目しておきたい。

三 三卷本色某字類抄との共通度

ここでは、二で見えてきた六丈献における漢語サ変動詞語彙と三卷本色某字類抄（前田本・黒川本）との共通度を、各文献特有語彙に限って見、若干の気付きを以下に述べるものとする。

*色某字類抄と共通するものについては、二に掲げた用例の頭部に、左の如き符号を付して他と区別した。

ⓐ：A 色某字類抄に、語幹・語尾（サ変の「ス」）に亘って付訓の認められるもの

*：B 語幹に相当する部分にのみ付訓の認められるもの

**：C 付訓は認められないが「イロハ」の所屬部から見て同一語と判断し

たもの
ⓑ：D 漢字は一致するが、よみが一致しないもの

以下、行AとDの分類項目を考慮しつつ、文献毎の特有語彙中の色某字類抄との共通語彙を整理すると、次下の如くなる。（以下には、二とは方針を異にし、語幹部分が一字のもの、二字のものを併わせ掲げる。但し、サ変動詞は、すべて省略に従う。）

(a) 三教指帰注

一字のもの（4語中0）

二字のもの（23語中17語）

B 引率 学文 合戦 虚妄 葬送 制止

金議 通達 同心 腹立 平癒 闊絶

影向 約束 論議

C 灸治 出入

(b) 法華百座闍書抄

一字のもの（7語中1語）

B 勞

二字のもの（27語14語）

B 引扱 加護 信受 凶絵 翻訳 雷電

療治 憐愍 廻向

C 懈怠 書写 普願 展転 円満

(c) 尤吉句義釈聽集記

一字のもの (37語中10語)

A 記 歸 坐 執 撰 配 略

B 縁 合 破

二字のもの (39語中12語)

B 降伏 究竟 乞食 相應 相承 上下

成就 差別 沈倫 報恩 用意

C 決定

(d) 高山寺本古往来

一字のもの (20語中5語)

A 禁 期 散 謝 秘

二字のもの (42語中21語)

B 應屆 延期 更発 合力 祈禱 騎用

興寧 參入 參持 上啓 承諾 推量

同道 披露 服仕 奉仕 補綴

C 早參 隨身 肥滿

D 来会 (色葉は「ライクワイ」)

(e) 古本説話集

一字のもの (4語中3語)

A 駭 判 要

二字のもの (13語中7語)

B 學問 希望 追従

D 精進 (色葉「シ」部) 受戒 (色葉「シ」部)

修行 (色葉「シ」部) 変化 (色葉「シ」部)

葉「ヘンクワ」

(f) 宇治拾遺物語

一字のもの (15語中8語)

A 詠 害 煎 帶 点 罰 封 (色葉「ホ」部)

ウス「もあり」崩

二字のもの (55語中36語)

B 勘当 起請 祈請 行道 苦痛 供奉

啓白 教訓 彩色 掃除 支度 隨逐

逍遙 蘇生 対面 聽聞 寵愛 用心

礼拝 流罪 礼節 会釈

C 婦依 教化 精進 装束 受戒 修理

沐浴

D 恪勤 (色葉「カクコン」) 気色 (色葉「キシヨ」)

「キンク」 「ケシキ」 呪咀 (色葉「シユシヨ」)

所得 (色葉「シヨトク」) 前駆 (色葉「センクウ」)

通夜 (色葉「ツウヤ」) 読経 (色葉「トクキヤウ」)

以上の結果から、凡そ、次下のことが帰納せられよう。

(1) 文献別の視点から

色葉字類抄との共通度が比較的高いものは、(f) 宇治拾遺物語・(e) 古本説話集、比較的低いのが(c) 光吉句義釈聴衆記・(d) 三教指帰注、これら両極の中間に位するのが、(b) 法華百座聞書抄・(d) 高山寺本古往来である。

右は、単なる数量上の比較に過ぎず、今後は、これらの差異を質の面から追究することが重要であることは、言うまでもない。

(2) 語幹部分が一字か二字かの視点から

(c) 光吉句義釈聴衆記・(e) 古本説話集・(f) 宇治拾遺物語の三文献は、一字漢語と二字漢語と、それぞれの、色葉字類抄との共通率は相近い。が、(a) 三教指帰注・(b) 法華百座聞書抄・(d) 高山寺本古往来の三文献のそれは、一字漢語の共通率がきわ立って低い。この問題も、(1)と同様、共通語彙、非共通語彙の、個々についての質的討究が、今後の大きな課題となる。

なお、共有語彙と色葉字類抄との比較、A・B・C・D相互間の関係については、別の機会に触れてみたいと考えている。

*これについては、今のところ、「各文献間での共有度の高いものほど、色葉字類抄との共通率

も高い。』ということを描きしうるのみである。

おわりに

以上は、鎌倉時代語研究と称しながら、実質は、極めて初歩的な段階にとどまっていることを深く反省する。

稚拙なりに、私どもは、次期の課題を左のように分析してみる。

一、色葉字類抄等、当期の国語辞書との関係

二、今昔物語集の漢語サ変動詞の位置付け

* * *
一、類義の、和語動詞と漢語動詞との相関

次稿では、今昔物語集を中心に据えて、漢語サ変動詞の特質を、聊かなりとも把握しようと、調査を進めている。

「付記」 本稿の作成に当たっては、小林芳規先生

をはじめ、同学の諸兄姉から、多くの御教導を賜った。

藤原与一先生・山田忠雄先生からは、折りに触れ、暖いお励ましの言葉を賜った。記して深謝申しあげ奉る。